

#### 4. PSKに於ける化学療法との交替療法の有用性に関する検討

東京医科大学外科第Ⅲ講座 柿沼知義, 木村幸三郎, 小柳泰久, 鈴木和信, 日馬幹弘, 鶴井 茂

【目的】免疫化学療法に於ける至適投与法検討の一つとしてPSKと5-FUを用いた交替療法と連続投与との比較検討を肝転移巣, 腫瘍内PGs, IAPを指標としておこなった。

【方法】形質細胞腫: RL♂1をBALB/C 5 Wks♂マウス背部に皮下移植後, 2週目に原発巣を切除した。交替療法として5-FU12.5mg/kgとPSK1000mg/kgを各々隔週に4週間, 持続療法は5-FU6.25mg/kgとPSK500mg/kgを4週間経口投与した。

【結果】1) 肝転移数は持続併用群で最も抑制された。2) PGE<sub>2</sub>は, 交替, 持続療法群共に併用群で低下した。TXB<sub>2</sub>は持続併用群で最も抑制された。3) 術後IAP量の抑制は持続療法群で21日目迄継続した。4) 生存率は各群間に有意差はなかった。

【結語】今回の実験系においては持続併用群が最も良好な成績を示した。

#### 5 アトピー性皮膚炎の汗疹性苔癬化型皮疹-成人型アトピー性皮膚炎の汗鬱滞による皮疹の形成について-

(皮膚科) 平林 徹, 奥田 知規, 徳田 安章  
成人型アトピー性皮膚炎のうち, エクリン汗腺の高密度分布域に一致して皮疹の増悪を認める成人型アトピー性皮膚炎を, 汗疹苔癬化型皮疹と称しこの臨床型が発汗と強い関連があると考え, 他の型のアトピー性皮膚炎との比較を, 発汗テストをはじめ, 免疫学的にも検討を加えた。発汗試験では皮疹部の発汗の低下, 汗貯留。皮疹の消長に一致して発汗機能の回復を認めたが, 免疫学的には差異を認めなかった。この事は反覆する汗疹及び搔破痕が抗原の侵入門戸となり, 惹起反応を繰り返しているうちに苔癬化を来したと考えられる。したがって汗疹とその搔破による変化, 抗原侵入によるI型とこれに続くlate phase反応, IV型反応の各々が共存しており, 組織像もこれに対応した多彩な反応型を示すと考えられた。

#### 6. 抗不整脈剤による薬剤誘起性肺臓炎をきたした一例

(内科学第三) 福田俊明 小林真人 松村康広  
久保隆之 露口都子 奥沢博美  
山本 忍 対馬裕典 六本木尚  
新妻知行 林 徹 伊藤久雄

症例は63才男性。主訴は体動時の呼吸苦。19才, 43才時に肺結核の既往あり。46才時より気管支喘息, 53才時に心室性不整脈指摘され近医にて治療を受けていた。61才時から当院内科通院となる。喘息は軽症でコントロール良好であった。63才時三段脈認めアプリンジン追加投与され, その1カ月後より全身倦怠感, 5週後には体動時呼吸苦出現し胸部X線上網状陰影認め同薬剤中止し入院となる。薬剤中止後症状軽減, ステロイド剤投与にて胸部陰影の改善を認めた。1年後シベンゾリン投与にて同様の経過をたどった。DLSTは陰性であったが経過, 諸所見より, 薬剤誘起性肺臓炎と考えられた。アプリンジンによる薬剤誘起性肺臓炎の報告は本邦で1例あるのみである。

#### 7. 抗リン脂質抗体症候群で発症したOverlap syndrome (SLE+PM) の一例

第三内科 北田 浩一, 阿部 守雄, 稲富 敏伸  
竹越 亨, 山田莊太郎, 福田 俊明  
殿塚 典彦, 林 徹, 伊藤 久雄

症例: 65才女性。現病歴: 1986年7月, 左下肢の重苦しい感じ。腫脹を自覚。同8月急激に下肢の腫脹悪化し, 本院外科へ受診し入院。8月, 深部静脈血栓症の下に, Fogartyカテーテルにより血栓摘除施行され, その後抗凝固療法継続される。平成3年7月より, 朝のこわばり, レイノー症状, 手指手背の腫脹と労作時の呼吸苦にて内科第1回目入院。このとき抗核抗体を始め多彩な自己抗体の出現と筋逸脱酵素の上昇のためSLE+PMのoverlap syndromeと診断, その後本年3月下旬, 筋炎の増悪と抗リン脂質抗体, Lupus anticoagulantによる脳血栓が併発し当科に2回目の入院となった。

本症例は, 6年前に深部静脈血栓症等の抗リン脂質抗体症候群で発症し, 5年後にSLE+PMのoverlap syndromeの診断に至ったcaseであり, ここに報告します。